

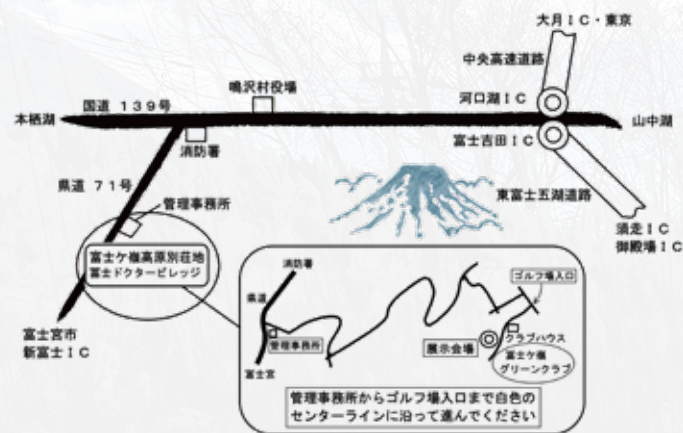


小さな野外展

ART STUDY

かつてホテルの再建計画が棚上げとなり残された基礎が、
台座のように野原にいくつか飛び出しています。
それらを作品の基軸とした展示を試みました。
台座とするか作品の一部とするか、思いは広がります。
つわどもが夢のあと、そんな富士山を拝した標高1100m強
での小さな野原の展覧会は、
秋の陽に高くゆれるすすきが思わぬ情景をかなでました。

主 催 ART STUDY実行委員会
(関 直美、室岡正明)
富士河口湖町富士ヶ嶺2-1148
協 力 富士ヶ嶺高原別荘地(富士ドクタービレッジ)
富士ドクタービレッジ村会
写真提供 志賀信夫、ART STUDY実行委員会
デザイン leekswork Co., Ltd.



小さな野外展

ART STUDY



酒井 信次
Sakai Shinji

関 直美
Seki Naomi

高田 芳樹
Takata Yoshiki

高村 牧子
Takamura Makiko

布施 新吾
Fuse Shingo

堀本 俊樹
Horimoto Toshiki

室岡 正明
Murooka Masaaki

吉本 義人
Yoshimoto Yoshihito



2024 11.1 FRI - 11.24 SUN | 12:00 ~ 16:00
金、土、日のみ

富士ヶ嶺グリーンクラブ前の野原

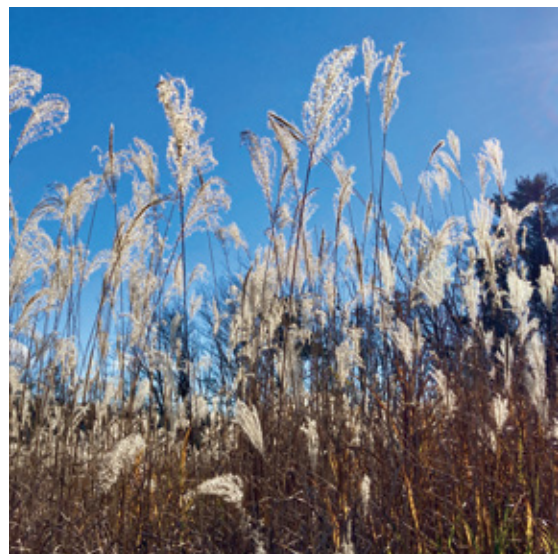
山梨県南都留郡富士河口湖町富士ヶ嶺2-1

人類と人間

宮田徹也 / 日本近代美術思想史研究

そこに着くと、入り口には看板と、小さな小屋が待っていた。扉を開くと芳名帳がある。所々にある基礎に、作品が置かれ、それぞれの表情を浮かべている。上には空が広がっているだけである。風が吹いている。私は何千の時間を遡った。バブル期から始まり、西大寺の礎石を見た記憶を通過し、恐らくこの地にも居たであろう新石器時代の人々と巡り逢い、彼等の作品を見ているような錯覚が頭を掠めた。

ホテル再建計画が棚上げとなって残された野原を切り拓き、この展覧会は行われた。無尽のすすき野を刈り、路と広場を創り、基礎の周りを通れるようにしたこの方法は、展覧会をゼロから立ち上げたことになる。規格がある美術館や画廊の展覧会とは、比べ物にならない。野外展ですら、既に場が準備されていることしかないのではないか。そう考えると、ゼロから立ち上げる展覧会こそが、現代美術に相応しい。



ここが標高1100mであることも、忘れてしまう。不二山と河口湖が近くにあることによって自然が強調され都会の喧騒を忘れてしまうというよりも、人類が地球上に限なく住居を点在させたことを振り返って、改めて驚く。とても人が住めないと考える所に居を構えて、生活してきたのである。快適、利便を追い求めて、結局は支配されていることに気づかない人間は、そのような人類の逞しさと勇敢さを思い出すべきだ。

人間は、地質学的に縄文人の時代である完新世を抜け出して、1950年代から「人新世」に突入したと定めようとしている。狩猟、農耕、工業、情報に続く、「Society 5.0」という言葉を日本政府が広めようとしているらしい。人間は、何処まで傲慢になったのだろうか。人類は、何十億年、地続きで繋がっているのだ。この事実を実感させてくれたこの展覧会に、次の開催を強く希望する。

酒井信次

Sakai Shinji

HIMMEL / 2024 素材:紙他



ART STUDYについていろいろ考えてみましたが、文も文字も出てこないの辞書を引いてみました。ARTは芸術、、、人の手で作られるもの。彫刻や絵も同じ。STUDYは、、、努力する、専念する、研究する、習う、注視する、、、など。まったくその通り。(其の通りーこれも辞書に出てくる。)STUDYの、いや其の通り、私は作り続ける事にします。



関 直美 Seki Naomi

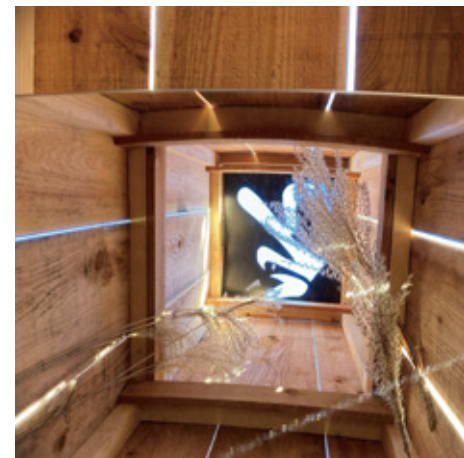
つわものどもが夢のあと / 2024 素材:ランバーコア他



近頃はこんなミニチュア的な世界を、ガリバーの気分になって粘土をひねったりしている。雨風をしのぐ構造の60cmスクエアの空間は、能舞台のような背景を描き天井には空、むき出しにした基礎から立ち上がる樹木は、倒れないようにテグスを張って押さえた。そのテグスはまた、この小さな世界を緊張させる要素を持つ。そう、重厚長大ではない軽薄短小の物差しを取り出してみた。

高田芳樹 Yakata Yoshiki

えそら / 2024 素材:ミクストメディア(木材、アクリル他)



この地で過ごした時間は170時間ほどか。日帰り4回、宿泊3泊4日、4泊5日の2回。

地元材料店の移動時間、温泉、大雨強風で沈殿の時間も。

何があろうとも、富士の三分の一にちょっと足りない1200m弱の標高からの空は心地よかった。

空に向かう柱の小さな穴から水平方向に「え」「エ」形の空を見る。見えるのは、真実?エソラごと?



高村 牧子 Takamura Makiko

ここのかたちという 2024秋を待つ / 2024 素材:鉄枠、羊毛糸



勉強会のような野外展をやろうと思う。と彫刻についての本も書かれている関さんが言う。写真を見ると気持ちのよい空と野原には彫刻の台座になるようなコンクリートの柱の台のようなものがある。私は真面目な彫刻科の学生だったので、彫刻における台座というものは作品の重量感や存在感を表す大事なものであるという教えを覚えている。

又、現代美術というのは絵画であれば額からの解放、彫刻であれば台座からの解放であると恩師である西洋美術史教師の教えもある。『重量感と存在感が無くそのコンクリートを台座として扱わない作品にしなければ』と私は思った。勉強なのだ。



布施 新吾 Fuse Shingo

無機質な日差し / 2024 素材:アクリルケース、ソーラーおもちゃ、コンクリートブロック



殺風景でリアルな感覚を感じる身近なものを題材にした作品を制作しています。今回は以前から何度か発表している太陽電池で動く100均のおもちゃを使い、エコとは?的な問いも含んだ作品にしています。日常のほんの少し違和感のある感覚を表現してみました。

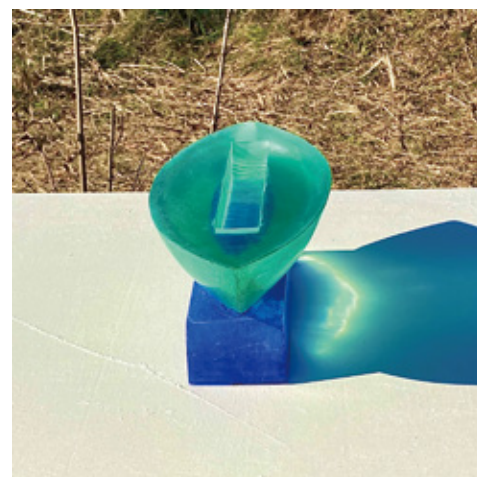


堀本 俊樹 *Horimoto Toshiki*

Fune Yama ni Noboru / 2024 素材:ガラス



展示したら影を通る光が作品の軸になっていた、今年はこの光をテーマにしているので当然でしたが、話を聞くと思いのほか強く効果が出たようだ。僕は現地では一度も作品を見ていない。下見の時の晴れた空と富士山、搬入の日の雨の中での設置、会期中スケジュールが重なって行けずじまい。何枚かの写真しか見ていないので富士山や高原の空は実際には頭の中の合成イメージでしかない、このような想像を重ねながらいったいどこに向かっていくのだろう？ 会場に行けなかった事も含めて楽しい展示でした。



室岡 正明 *Murooka Masaaki*

木傭 / 2024 素材:ヤマザクラ



30年ぶりに鑿を研ぎ、道具の手入れをしました。ガラクタ置き場と化した作業小屋を少し片付けて床が見えるようにしました。作品は、越し方行く末を想い落日を観ている自身像です。山桜材で木製の人型(木傭 もくよう)をイメージして作りました。今回の参加で、音信途絶えていた知己と連絡が取れ、また新たな出会いもあり、これが生涯最後と思っていたのに来年のことを考えている私がここにいます。遠路はるばるお越しいただき、ご高覧下さり、ありがとうございました。



吉本義人 Yoshimoto Yoshihito

上) 5つの直方体 / 2024 素材:ステンレス 下) 水平値より / 1995 素材:鉄



ススキの原っぱの中に、60cm×60cmの建築用の基礎が点在していた。バブル時代の記念碑でもある台座を利用した野外展の計画である。私は2点の彫刻で構成しようと考えた。1点は近作。もう1点を作品庫の中から探し出した。1995年作、30年前の作品である。この頃、近作展の中に旧作を併存させるのも面白いと考えている。50年も彫刻を作ってきたからであろう。変わるものと変わることの出来ないものを見るのである。

関直美とすすきの高原 志賀信夫 / 批評家

山梨県の河口湖は富士五湖の一つで別荘地も多く、その一つに富士ドクタービレッジがある。現在700戸、東京ドーム47個分、標高1100mの分譲地で、かつてホテルを建てようとしたが中止に。現在、コンクリートの基礎のみが点在する。医療関係者の医師村が始まりで、名前はその名残だ。美術家、関直美はここで別荘をアトリエにしているが、そのホテルの基礎の残った高原で野外展示を企画した。秋にはすすきが2m以上、関はそこを草刈機で切り開き、2024年11月「アートスタディ 小さな野外展」を開催、8人の作品が集まった。



関直美「つわものどもが夢のあと」は蓋が少し開いた木の箱で、中に空と森と小さな木と人形、何本も伸びた黄色い紐が弦にも見えて、小さな舞台から音楽が漂うようだ。吉本義人「5つの直方体」は、直立した鉄の5つの直方体が叩き出しのデフォルメで表情を見せ、「水平値より」は鉄の小さな角柱の組合せが森の木を思わせる。布施新吾「無機質な日差し」は、花の揺れる透明なおもちゃ箱が楽しい。高村牧子「このかたちという 2024秋を待つ」は、四角い太陽のような虹色の編み糸がコンクリート柱を覆う。堀本俊樹「Fune Yama ni Noboru」は、ガラスによる青い台の緑の船が空に漕ぎ出すようだ。酒井信次「HIMMEL」は、空と森をまとう紙人形が富士と題名の「天」を望む。高田芳樹「えそら」は、巨大な二本の木柱の中、羅針盤とくりぬかれた「ア」と逆さの「え」から空が見える。室岡正明「木俑」は、人体のフォルムが静かに浄土を向く。タイトルと作品がいずれも自然を見つめ、人間とアートのあり方を問いかけているが、それはこの場、富士を望む広大な大地と建てられなかった建築の基礎、人間の幻影の痕跡ゆえだろう。来秋も期待したい。

